

C. 総合学習の研究

三橋 一夫 徳井 輝雄 高須 明 田中 裕巳
白井 宏 山田 雄一 安藤富美子 服部 祐子

〔I〕総合学習をめぐって

田 中 裕 巳

1960年代末の、あの“学園”を席卷した“教育紛争”は、ある意味で既成の科学・学問に体现された知の現実の有効性を問う大衆運動であったと思う。当時の高校生たちの「何のために大学受験の勉強に没頭してきたのか」「勉強とは何か」「ペーパーテストの点数だけでランクづけされる人間の“能力”とは何か」「人間の能力とは、そんな一元的なものか」「われわれは灰色の三年間に、大切なものを見失っていたのではないか」「真に人間らしく生きるとは、どういうことか」という声、声、声^①。あの声の底にあったものは、“学園”としての大学への幻想をつき崩された者たちの、今、生きている場所での教育、学習の意味への、目覚めであったと思う。“紛争”の終結とともに、自主ゼミ的方法を導入する学校があらわれた。国立大学の附属高校に限定しても、お茶の水女子大附属、京都教育大附属などの場合には、社会科の中で“現代学習”として行なわれた（京都の場合は社会科とは限らないようだ）。しかし、そこでは、既成の教科の枠の中での、生徒たちの自主的学習の重視ということであって、各教科の構造や連関を問いなおし高校教育における“教養”のなかみを問いなおすまでには至っていなかったようだ。

70年代に入って、各種公害の発生原因の究明や対策において、既成の科学学問がほとんど役に立たないことが次第に明らかにされて行った。人文科学、社会科学においても同様に、専門細分化された諸科学の総合化・統合化が問われ、いくつかの大学で総合科学部・社会科学部などの設置が見られたりしたのはその傾向の一つの表われであった。

74年に梅根悟和光大学学長を会長とする日教組教育制度検討委員会は、“日本の教育改革を求めて”最終報告^②を発表した。その中で、「個別的な教科学習や学校内外の諸活動で獲得した知識や能力を総合して、可能なかぎり現実的問題についての追求や社会的行動に役だたせるような総合学習を展開すること」とし、教育課程の教科・総合学習・自治的諸活動の三領域論を提

案した。人類の世界観を大きく転換させた“科学上の発見”や“社会体制の転換期”、今日の社会では“公害”“平和問題”“A・A・LAへの認識”“差別からの解放”“性の問題”などが総合学習のふさわしいテーマとされ、「個別教科ではあつかいきれないものになっている」テーマとしてあげられている。また総合学習は「特定の教科のひとつの単元として展開してきしつかえないものもあり、また自治的諸活動のなかにも総合学習的なものが多く、学芸会、文化祭などの行事は総合学習の場である」として、総合学習が一つの独立した領域であると同時に、教科や自治的諸活動の領域においても、総合学習が方法とともに目的としても成り立ち得ることを展開していた。

日教組教育制度検討委員会の報告書を受けて設置された中央教育課程検討委員会（会長梅根悟和光大学学長）は、76年、“教育課程改革試案”を発表した。この試案では、前記総合学習の構想を更に発展させて、Ⅱの各論Ⅰ教科の12番目で、“総合学習”を更に詳しく論じている。

この中央教育課程検討委員会の教科の1つとして総合学習を位置づける“試案”がまとめられるまでに、委員間で“総合学習”の位置づけをめぐってかなり議論があったようだ。委員の一人海老原治善は次のように述べている。

「……筆者としては、やはり総合学習は、教科の延長線上の側面と、自治的諸活動の側面からの総合学習との両面をもつ中間領域として位置づけることにより、長く教育実践のうえで、営々たる努力と教育的な効果を発揮しながらうずもれてきた『生活勉強』を領域として設定することにより、本格的に展開が可能になるとして強力に主張をくりかえしたが、合意がえられなかった。やかて時期も迫ってき、しかも多数決できめる性質ではないので、一致点をみいだす努力を続けることにし、そのなかで、『従来の教科の枠を出て、現実諸課題についての系統的な学習を組織するという総合学習の意義や、そこで行な

われる活動の内容については、委員会としてはほぼ一致したので、領域論にこだわらず、実質の確認をえたものとして、教科の領域に総合学習をふくめ、教科外活動に『研究活動』を内容として新たに設定することで了承することにしたわけである。』^③

ここに明らかなように、74年の「日本の教育改革を求めて」の3領域論から、「試案」においては、総合学習の領域としての独立を認めず、教科と自治的諸活動を中心とする教科外活動の2領域論に移行した。^④

「試案」の(I)教科、12総合学習の章の骨子は次のようになっている。

1. 現状と問題点

- (1)地域的・国民的諸課題の学習の発展
- (2)感性の喪失と遊び・労働の学習
- (3)受験体制の克服とゼミ・実習活動
- (4)未来からの問いと総合学習
- (5)総合学習の意義

2. 総合学習の教育課程上の位置

- (1)戦前・戦後の遺産の継承
- (2)教科学習と総合学習
- (3)自治的諸活動と総合学習

3. 総合学習の内容と方法

- (1)総合学習の内容
- (2)総合学習の階梯ごとの特徴
- (3)総合学習の方法

4. 総合学習具体化をめぐる当面の諸問題

第1階梯および第2階梯（略）

第3階梯（中学校）

- (1)学級・学校行事を基盤とする総合学習へのとりくみ
- (2)学級や学校でおこった問題、自分および家庭生活の諸問題 「あだな」「愛と性」「差別」など
- (3)時事的諸問題 「憲法記念日」「中学生の集団暴力」など
- (4)地域や国民的課題 「有害食品」「ゴミ戦争」「反戦平和」など

第4階梯（高校）

- (1)家庭科、保健、社会科、理科の協力体制による総合学習の展開 「環境と人間」「性」「医療と健康」など
- (2)選択科目における「講座」設定による総合学習の展開 「地域研究」「都市問題研究」「現代文化研究」「婦人問題研究」「憲法と政治」「生物研究」「民族芸能研究」など
- (3)「学活」に位置づけ展開する総合学習
- (4)総合学習の役割^⑤

1の(5)総合学習の意義では、「個別的な教科の学習

や、学級内外の諸活動で獲得した知識や能力を総合し」「社会認識と自然認識の統一を深め、認識と行動の不一致をなくし、主権者としての立場の自覚を深める」として、各教科や学級内外の諸活動の総合としての意義が強調されている。

3の(2)総合学習の階梯ごとの特徴では、第3階梯では「時事的な総合学習が主流」とされ、第4階梯では「時事的な総合学習にくわえて、理論的な総合学習にとりくませ」「これをとおして、自己の進路の基本的方向をつかませたい」としている。「平和」「公害」「差別」「性」の4つの問題が総合学習のミニマムの必要とされている。

以上の74年の「日本の教育改革を求めて」と76年の「教育課程改革試案」にふまえた、総合学習の理論的および実践的な展開の一つの成果として、私たちの前に、77年、『総合学習の探究』（勁草書房）が出されている。

私たちの研究グループ「総合学習の研究」の出発点を、以上の諸成果に学ぶという所に置きながら、私たちは次のような方向で研究の深化を図りたいと思っている。

1. 科学における総合とは何か

細分化された諸科学における総合化の動きの中で、総合へ向かっての自覚的方法の中に、総合学習にとってもまた有効な視点が提示されないか。〈志向性〉〈相互主観性〉〈他者との鏡像関係〉〈生きた身体〉〈自然と人間のための経済学〉〈弁証法的自然〉等々の「重要な観点」が私たちの「新しき旅」の導きの糸になり得ないかどうか。^⑥

2. 「合科」としての総合学習の系譜

木下竹次、郷土教育、コア・カリキュラムなどの理論と実践を再検討してみること。

3. 高校のあり方と「総合学習」とのかかわり

総合制高校と総合学習の2つの総合のかかわりは、単なるアナロジーに近いとしても、高校教育における各教科および自治的諸活動がどのような「総合」をしめされるかは、高校教育の基本の問題である。総合学習が卒業研究的な位置づけされた場合の意義は大きい。

4. 認識の方法としての「総合性」

これは1の中に含まれるのかもかもしれないが、言葉という第2信号系への過度の信頼の上に成り立っている現在の教育に対して、第1信号系としての感性的認識の復権が考えられてよいのではないか。文字よりも映像や漫画などをより多く認識の方法として育ててきた「現代っ子」に対しては、認識の方法としても「総合学習」を考えて行く必要があるのではないか。

私たちの研究グループには以上のような様々な研究関心が入り混っている。それらをおつけあいしながら、

国語（白井）、社会（田中）、数学・技術（徳井）、理科（三橋・高須）、英語（山田）、保健（安藤・服部）の教師がそろっている利点を活かして、私たちの総合学習の理論と実践を創造して行きたい。

〔注〕①半栗清司編『高校生は反逆する』（三一新書）

P 106

②『教育評論』74年5・6月号P71～73

③梅根悟・海老原治善・丸木政臣編『総合学習の探究』（勤草書房）、海老原治善“現代学校の教育内容改革と総合学習の意義” P49

④『教育評論』76年5・6月号P24 “あくまで

「総合学習」を知識や技能を系統的に学習する教科の領域に属するものとする意見”にもとついて“試案”がまとめられたことを付記している。

⑤同上、P 161～175

⑥堀内守『構想力の冒険』（黎明書房）P 187～189。中村雄次郎『感性の覚醒』（岩波書店）、同『共通感覚論』（岩波書店）、伊藤虎丸『魯迅と終末論』（龍溪書舎）、武谷三男、中岡哲郎、花崎皋平らの仕事などを参考に行きたい。